

琉球大学学術リポジトリ

[資料] 宮古諸島のジオパークの可能性を探る

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安谷屋, 昭 メールアドレス: 所属: 宮古島市文化財保護審議委員会
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017723

宮古諸島のジオパークの可能性を探る

安谷屋 昭

(宮古島市文化財保護審議委員会)

I はじめに

琉球列島は、サンゴ礁に囲まれた亜熱帯の島嶼地域で、日本だけではなく世界の中でも独自性のある自然や文化が発達し、ジオパークの資源も豊富である(尾方 2009)。その中で、宮古諸島は、更新世のサンゴ礁に起源をもつ琉球石灰岩が広範囲に堆積する地域である。宮古諸島のうち、宮古島や伊良部島では農地造成、ゴルフ場建設、リゾートホテル等の増設による土地改変が進み、先人達が体験した昔懐かしい里山の森林景観や里海の海岸・渚景観は一部消失しつつあるが、琉球石灰岩島としての特有な地形・地質は残存している。宮古諸島は生物資源に乏しい面はあるものの、地質や地形遺産については資源が豊かといえよう。

本稿では、宮古諸島の中でも、特にジオパークの資源になりうる地球科学的な素材がみられる3地域を取り上げ、特筆すべき自然的・文化的資源を記述する。

II ジオパーク資源

琉球列島(琉球弧)は亜熱帯性気候帯にあり、その恵みとして、更新世のサンゴ礁海を起源とした琉球石灰岩が、沖縄諸島をはじめ、薩南諸島から先島諸島にかけて陸部・海部に広く分布している。中でも、宮古諸島には火成岩層や新生代第三紀以前の古期石灰岩はなく、島の大半(98%以上)に更新世の琉球石灰岩が広く分布している。主島である宮古島の基盤は第三紀の島尻層群(泥岩や砂岩の互層)で、その上位には琉球石灰岩が厚く堆積している。表層の土壌は主に赤褐色の大野越泥土層と海浜の砂丘砂層からなり、海岸部には板干瀬(ビーチロック)もみられる。

宮古諸島はかつて、中国大陸および台湾島とつながる陸橋(陸地)であったと考えられている。現在の8つの島の原形は、その後の氷河性海面変動や地殻変動など、長い地史上の過程を経て形成されてきた。陸橋時代に移動して来たと考えられている動・植物は繁殖したり、消滅したりして、現在の生態系の原初をつくった。このことは洞窟から出土する複数の人骨化石や、ミヤコノシカ・ヤマネコ・ハタネズミ・ハブ・ケナガネズミなどの多数の化石(大城 1981)、さらにサン

ゴ片・貝・微化石等の年代測定などにより推測されている。

その後、完新世に入ると、大きな氷河性海面変動や地殻変動はなく、比較的安定した温暖な気候となり、適時な降雨をもたらし、森林も成長して小動物が繁殖した。そして、石灰岩層は溶食を受け、洞窟・陥没ドリーネ・凹凸のあるサメ肌地形など、地上や地下に多くのカルスト地形が形成された。

宮古諸島の台地は、石灰岩が作り出す多様なカルスト地形や、産出する100種をこえる化石、鍾乳洞(方解石)、リン鉱石の鉱物などの一大宝庫である。石灰岩堤には、北北西-南南東の断層丘脈群があり、断層崖はほとんどが北東落ち南西方向に緩傾斜をつくり、島がケスタ状地形を成している。川は発達していないが、広く地下水盆が形成されている。

宮古島の海岸は、北東側と西側、南西側に特異性がある。干潮時の渚海は干湿帯となり、礁池(イノー)や礁原(リーフ)からなるサンゴ礁地形が発達し、すぐれた海岸景観がみられる。里山・里海はまだ昔を偲ぶものがあり、美しい自然がまだ残っている。

以下、宮古諸島におけるジオパークの可能性について、次の3地域を中心に探ってみよう。

1. 伊良部島・下地島

伊良部島・下地島の基盤岩となる第三紀島尻層群のほとんどは海水準以下に堆積している。琉球石灰岩は、その基盤岩とは不整合で堆積し、古い順に保良石灰岩、友利石灰岩、下地島石灰岩、白鳥崎石灰岩とよばれる。石灰岩の構成物は有孔虫・サンゴ片・石灰藻球などの化石を含む石灰藻球石灰岩やサンゴ石灰岩等である。琉球石灰岩の層厚は約111m、石灰岩の堆積年代は約120万年前と推定されており、伊良部島の最も古い石灰岩は、琉球列島で最古の琉球石灰岩層とされる(佐渡ほか 1992)。

伊良部島の最高地点(88.8m)の牧山は北西-南東方向に走る断層崖上(石灰岩堤)にある。牧山を中心に北西や西、南西方向へ緩傾斜した海岸段丘面(低位、中位、高位)の平坦面が形成され、洞窟など様々なカルスト地形が発達している(矢崎・大山 1978)。

下地島は、伊良部島とは入江水道（約3 km）を挟んだ相似形の低島で、島の西側に最高地点（21.7 m）があり、東側（入江）へ緩傾斜し、標高8～15 mの平坦面を形成している。「通り池」の北側や東側は侵食され、樋状の細長い谷をしたドライバレーや陥没ドリーネなど、様々なカルスト地形が発達している（伊良部町・沖縄県ケイビング協会 1994）。

以下、この地域にみられる自然・文化的な事象のうち、顕著なものを列記する。

- ・牧山の断層崖下一帯には県内最古の琉球石灰岩（120万年前）が形成され、海岸部にトラバーチン大岩がある（“ヤマトブー大岩”，市指定史跡）。
- ・元・牧山鉱山では、石灰岩層の空洞から、宮古諸島で最大の方解石が産出していた。
- ・牧山南側段丘一帯を中心として、陥没ドリーネや、県内唯一の垂直に発達した深さ20 m～55 mの縦穴洞窟群が形成され、そのうち7つが市指定史跡となっている（伊良部町・沖縄県ケイビング協会 1994）。
- ・白鳥崎の完新世隆起サンゴ地形の岩礁海岸や海食洞・海食崖は、市指定の名勝となっている。
- ・陥没ドリーネや縦穴洞窟から、複数体の化石人骨・ミヤコノロシカ・イノシシ・ケネガネズミ・コウモリ等の化石発掘で確認がなされている（伊良部町・沖縄県ケイビング協会 1994）。
- ・佐和田の浜の海域、干出帯には岩塊群（320余）があり、歴史津波や古津波、二重ノッチ岩塊がある（河名・中田 1994）。また、魚垣と呼ばれる石積（市指定有形民俗）や現生の有孔虫が生息する藻場が広がっている。
- ・白鳥崎から西方へ、下地島「通り池」海岸まで広がる礁原・礁嶺・礁湖等を形成するカタバルイナウ（内海のイノー）は昔から優れた漁場であり、色の变化するエメラルド海色等があり、点在する大小の岩礁、魚垣等とが一体となって、広大な海の渚風景を形成している（渚百選）。ノッチ等から過去2千年来の津波等の自然事象が読み取れる。
- ・下地島の南西海岸から北北西海岸に亘る陸部・海岸部は、優れた隆起サンゴ礁地形を残している。海岸線に沿った陸域は、溶食による沖縄最大のカルスト地形群が発達し、中の島海岸やピサラボウ海岸、北側のナカバダやビウフツチャの海岸は1 m内外のベンチ状の新时期海食棚（完新世）が形成され、国の名勝地、県の天然記念物となっている。連結した2つの“通り池”や“オコイキ”，“ガーナイキ”，

“ナガビダイキ”などがあり、その形成要因は陥没ドリーネであるとか、新时期の海食棚に取り残された凹地という見解もある（矢崎・大山 1978）。

- ・下地島と伊良部島の間には入江水道（約3 km）があり、伊良部島側はリアス状の入り込んだ地形をなし、対して下地島側は入り込む地形はなく対象的である。入江水道には、他の海岸部に堆積しない、砂丘・古砂丘堆積物が両岸に3 km余に亘って形成されている。
- ・黒浜御嶽（兄妹産神）は、島の村立の伝説がある。「始めは魚や海蛇であったが、神の教えの通り夜ユウナの葉を二人の間に置いて寝ると、四番に人間の子が誕生した。その人間が島中に広がった」とされる（大川 1974）。
- ・下地島西海岸に、民間信仰の「神体」として崇められている、下地島巨岩（帯大岩、オコスクビジーあるいはヌーマミージー）がある。明和大津波（1771年）の時に打ち上げられたノッチ形成の天然記念物である。
- ・「通り池」の継子伝説、木泊り村のヨナタマ（人魚）津波伝説、オコキダ（浮き田、動く田）伝説、乗瀬御嶽、比屋地御嶽などの由来が、奇談・珍談として興味深い（大川 1974）。

2. 池間島・大神島・八重干瀬

1) 池間島

池間島は、宮古島に多く見られる約北北西-南南東方向の断層系の延長方向にあり、宮古島の活断層群（2005年に地震調査推進本部によって、全国主要活動帯として指定された）の北部の位置にある。池間島の断層崖として、島の最高地点のバリナウ岳（仲間越の背後、標高28.1 m）を基点とした池間断層（バリナウ断層）、東北海岸（トゥイナツンミーフドゥウラ）、北西海岸（カギンミー灯台一ツサイトガイ）が推定されている（矢崎・大山 1980）。

基盤である第三紀島尻層群は現在の海水準以下にあり、地表には琉球石灰岩が露出している。池間湿原（イーノブー）の西方などを中心に基底岩として友利石灰岩が広く分布しており、その周辺部や海岸縁辺部に下地島石灰岩や砂丘堆積物がある。隆起の過程で形成された海成段丘形成時の取りこぼしのような侵食谷状の低地（くぼ地）があり、吸田（長田田湿原北西：明和大津波に冠水）一帯等には段丘堆積物（サンゴ片の碎屑砂・石灰岩小礫・湿地帯植物遺骸）がみられる。集落や林地内には、石灰岩が堆積した後に形成されたと考えられるサンゴ礁地形が大小の凹凸カルスト地形

として残存している。これらの地形から、池間島の原形は、他の宮古諸島の大きな地殻変動を受けつつ、完新世にかけての隆起によって形成されたと考えられる。

池間島には、このような変動地形や海成段丘、様々な石灰岩地形や砂丘堆積物などがみられる。以下、池間島の自然・文化的な事象のうち顕著なものを列記する。

- ・池間島は馬蹄形の形をしている。フナクス海岸は天順・成化（1457～1477年）頃、ミスバイ・イナウに堆積していた砂礫が移動し砂丘状地形を形成するようになり、これまで2つの島であったものが、入江の出入口であったフナクス海岸に次第に砂礫がたまり、その砂丘堆積状況を知った「四島の主」が1525年にイーノブー北口を土木工事で塞いで現在の1つの島となった（大井 1984）。そして1982年以降、池間漁港の建設により、現在県内最大の池間湿原となる。砂丘形成史、水生植物群落、野鳥、マングローブ等の研究に貴重なところである。
- ・灯台一帯の山地（アダンニーなど）が見事なカルスト地形を成し、アダンなど海岸植生に優れ、ヤシガニ（マクガン）やオカヤドカリが保護されている。
- ・東海岸（トゥーヤヒダ）から北東海岸（ミスバイヒダ、クピンプー、フドウウラ）には、完新世に形成されたと考えられる潮間帯ベンチや円筒状縦穴地形（ポットホール地形説、埋没化石林地形説）がある。池間島は完新世地殻変動等の研究に貴重なところである（安谷屋 2000）。
- ・島の東部（ムイクス）一帯には、第三紀層起源の古砂丘が広く堆積している。地表から3 mの下層から貝塚（？）が出土（タカセガイ、チョウセンサザエ等）している。砂丘地形成や自然史研究に重要な場所である（安谷屋 1999）。
- ・ナナムイ（ウハルズ：大主神社）を尊崇な拝所として古来から祭祀組織がなされ、最大のマーケット等数々の祭祀行事が行われている。ナナムイ、ナカマニー、ムイクス、ムッドウマイなどは祭祀生活を支える場所で、自然と民俗文化の一体感のある集落である。
- ・宮古島市のモデルプランとして、国の「持続可能な観光化づくり支援事業」を活用した地域資源の保全と利用計画が進められており、地域の活性化と社会・経済の発展につなげる島おこしがスタートしている。楽しくわかりやすい「池間島ガイドブック」等の作成が検討されよう。

2) 大神島

大神島には、神人以外は人が入ってはならない御嶽（ウブ御嶽）があり、キット海賊が宝物を隠したという伝説もある。急峻な山地状地形を成しているためか、全島の地質や生態系、考古学上の調査は十分とはいえない。

大神島は、周囲2.23 kmの、ほぼ円錐形の地形である。島の最高地点（トゥンバラ岩塊：遠見台、74.8 m）を中心に三本の稜線が形成され、全体的に急峻な山地地形である。宮古島とは異なり傾動化しておらず（矢崎・大山, 1979）、ドーム状隆起になっている。堆積地層は、宮古で最も古い第三紀中新世～鮮新世に堆積したと考えられる島尻層群大神島層（大神島泥岩、大神島砂岩の互層）から成り、その層厚は約1,200～1,500 m内外と推定されている（矢崎・大山 1979）。

琉球石灰岩は、隆起と共に急峻な地形となり、決壊・崩落し、山地斜面や海岸部では多くの岩塊が転石となっている。北北東海岸丘地（ブナイ、ナカシバラー帯）にのみ堤防状の高まりの石灰岩堤が層厚約8 m、長さ約80 mで残存し、堆積当時の石灰岩層の名残がある。島が狭小かつ急峻であることなどから地下の集水面積が小さいが、住民は湧水井戸を掘り、地下水を利用していた。海岸線には地下湧水口は少なく、降雨は、地下への浸透より表流水として流出するものが多い。

海岸並びに海域部には、転石群のほか、西海岸の西の浜やパサマギス地帯に砂州・砂丘堆積物があり、小規模の下地島石灰岩も確認されている（矢崎・大山 1979）。南～南東～北東側には、下地島石灰岩による潮間帯ベンチが広がり、海岸の潮間帯ノッチは深くえぐられた海食洞状に発達している。北側の海域には、ベンチ状に発達した岩礁帯（礁原）や、礁池に根付きのノッチ離れ岩、ノッチのある小島露頭が点在している。ノッチ岩塊の侵食は4,000～1,000年前から始まっていると推測され、このノッチは宮古諸島の中で最大級の侵食年数を有する岩塊である（安谷屋 2007）。南東海岸には島尻層群大神島層の露頭がある。その大神島層の大半をしめる上層部は大神島砂岩で、その下層は大神島シルト質泥岩である。これまでに古代ゾウ化石、大型淡水産スッポン、マガキ、貝類の化石が採集確認されている（大城・長谷川 1998）。火成岩礫、貝類等の化石密集層、厚い砂岩層には、波痕・偽層・斜交層理等が見られる。この露頭は、大神島層の堆積環境や完新世地殻変動、氷河性海水準変動等を推定する場所として貴重である。

以下、大神島の自然・文化的な事象のうち顕著なものについて列記する。

- ・大神島の隆起は、傾動地塊のケスタ状地形をつくらず、ドーム状隆起による円錐形状の山地状地形を成し、山地内及び海岸部に多くの転石群を形成している（安谷屋ほか 1977）。
- ・海域部に広がる潮間帯ベンチや岩礁帯に、多くの岩塊や小島露頭（根付き）があり、宮古諸島最大の侵食年数をもった海食洞ノッチおよび潮間帯ノッチを形成している。完新世地殻変動等の調査研究に貴重である（安谷屋ほか 1977）。
- ・大神小中学校の南東海岸（カミカキス～ンナパウイ）に宮古諸島最大の第三紀の島尻層群大神島層の露頭があり、地層の成り立ち、化石発掘、堆積環境等の調査研究に貴重である。
- ・古井戸が4ヶ所ある。集落の下位面にある井戸（フタガー）は飲みやすく良質だが、上位面の井戸（カフカー）は、やや塩辛く味が良くない。大神島の不思議な現象としてしばしば話題にされる。BTB溶液や硝酸銀溶液による化学反応を調査したところ、水質は中性～弱アルカリ性で、かつ塩分濃度が高いことが確認された（安谷屋 2004）。その要因ははまだ定かではないが、潮風塩害、生活雑排水などの有機物、岩塩層堆積などの可能性がある。学校の井戸でも旧暦9月にはカーヌヨーズ（井戸の祝い）が行われている。
- ・大神島は島全体が聖地とも言われ、大神島の創世神は、ウプタキ（大お嶽）の祭神として祀る“島の主”と“豊穡神”の「夫婦神」と「水神」の二神であるといわれている。この創世神には始祖伝説（昔、海賊におそわれたときの生き残り兄妹が夫婦になって祖神となる）がある。島のウヤガン（祖神祭）は、旧暦6月～10月まで5回行われる。ウヤガン祭は大神島で行った後、島尻集落につながっていく。ウプ御嶽は「神女以外は入ってはならず、島外の者は近寄るだけで警戒の目で見られる」と言われ、「ウヤガンの見学も厳しく、違反すると祟りがある」と伝えられて来た。大神島の祭祀内容はほとんどが秘められたままになって、神の秘祭が行われているようだ（平良市史編さん委員会 1994）。

3) 八重干瀬（やびじ）

琉球列島のサンゴ礁海は、古来から歴史・文化的な秘話、逸話など話題の多い場所である。その一つに、宮古諸島の“八重干瀬”がある。八重干瀬は池間島の北5～15 kmの位置に、南北約10 km、東西約6.5 kmに広がる日本最大の台礁（大小約100のサンゴ礁）である。毎年春、旧暦の3月3日（サニツ）、潮干狩の

時季に広く浮上し、八重干瀬のサンゴ礁（台礁）は、「幻の大陸」と呼ばれている。

八重干瀬は、昔から海難事故の多い場所でもあるが、地域の漁師（海人）はこの豊饒の海を神から贈られた海の揺籃として崇め、魚介類の多い“藻場”や“サンゴ礁”を「玉藻」「玉サンゴ」「玉魚」として大事にし、今も「島の宝、共有財産」とされている（八重干瀬同人 1991）。

八重干瀬では、古来からこの豊かな漁場が「海の畑」として利用され、それぞれのリーフや岩礁にいろいろな思いが込められ、岩礁の特異性を示した名前がつけられている。カナマラ（頭）、ドウ（人間の胴）、ウル（ツノマタ）、イラウツビシ（イラウツ）、ンナガマビジ（サザエの幼貝）、ユラジ（黒色の魚）、サグナナガビジ（ホラ貝）、ミクロな地形として、シーヌヤ（イワシの幼魚の家）、ンーナヌヤ（サザエの家）があり、それぞれの名前の由来は、魚、海藻、人体、人物等にたとえられている（八重干瀬同人 1991）

八重干瀬の台礁には、現生サンゴ礁を形成する礁原と礁嶺があり、その基底部は友利石灰岩である。フウガウサ、キジャカの両島のリーフ上には、暗礁岩塊等が点在している。全体的な地形は、宮古島などのように傾動地塊（北東落ち）化していない。また、フガウサ、ドウ等の一部に根付きの露頭（岩塊）があったが（1970年頃に筆者が確認）、近年は平坦化し、北側の礁縁は急激に深くなっている。

現在あるフデ岩、八重干瀬、東平安名岬のパナリ岩礁、宮古諸島周辺海底は現生サンゴ礁以外の石灰岩層を基底岩に有することから、現在の八重干瀬に点在する根付き岩塊や転石も、陸化していた時代に構成していた石灰岩であったと考えられる。従って、八重干瀬台礁は、陸地の名残りであり、隆起の際に取り残された台礁地形と考えられる。

以下、八重干瀬の自然・文化的な事象のうち、顕著なものを列記する。

- ・八重干瀬を中心としてサンゴ礁海のサンゴの種類や成り立ちを知ることが出来る。
- ・古来、漁師海人が「海の畑」として利用し、リーフや特徴のある場所に名前を付け、「島の宝、共有の財産」とされてきた、サンゴ礁の自然と共存して来た島民の知恵がある。
- ・現在「八重干瀬観光ツアー」が毎年春の大潮時に実施されているが、行政、漁業組合、フェリー海運、観光協会等が一定のルールを持って八重干瀬の保全を行い、経済効果も上げている。

- ・八重干瀬では、イギリス、フランス、オランダ、ドイツ等の異国船の漂着など事件発生時の救助活動が行われて来た。特に1797年5月に起きた「イギリスの探検船、プロヴィデンス号406トン、乗組員115人の遭難」事件、そして1873年に上野地区宮国海岸に漂着した「ドイツ商船ロベルトソン号遭難」事件は、共に歴史的なものである。島民は救助に専念し、食料を提供するなど、代価を要求することなく、友好的な態度で迎えたことが内外で高く評価され、後に両事件とも盛大な記念行事がもたれ、宮古の「博愛美談」として、歴史的な国際交流の出発点となった（プロヴィデンス号来航200年記念祭実行委員会1997）。
- ・八重干瀬は、神話、伝説、生活文化の舞台である。また、日本民俗学の創始者の柳田国男は、八重干瀬で沖縄の個性的な文化の研究（海南小記）や、日本人の起源にかかわる歴史、民俗学の研究（海人の道）を行った。また、八重干瀬同人が発行した「八重干瀬 第11号」の特集、この地域で聞き取り調査をした宮川耕二による「八重干瀬物語」（八重干瀬同人1991）や、地元の民俗、郷土史研究者伊良波盛男、川上哲也や故伊良波富蔵の「八重干瀬絵図」作製、故前泊徳正による八重干瀬にまつわる実話、伝承文化の調査がある（川上2007）。

3. 保良・東平安名岬一带

保良海岸から宮渡崎、東平安名岬を経て吉野海岸に至る陸域部・海域部の地域では、第三紀鮮新世島尻層群の平安名層を基盤として、上層部には第四紀更新世琉球層群の保良石灰岩が形成されている（矢崎・大山1980）。この一带は宮古島東部の中位段丘面から低位段丘に下っていく場所で、陸域部には断層崖、海食崖、円錐状カルスト丘地、地下湧水、ウバーレ、ドリーネが形成され、海岸にはビーチロック、石灰華段、砂丘地、海岸洞窟、津波石、転石、離れ岩（岩塊）が見られ、海域には典型的なサンゴ礁タイプの礁原、礁嶺、礁湖、礁池が発達している。東平安名岬灯台の北東にはパナリ岩礁があって、巨大岩塊、小島、砂州が形成されている。東平安名岬は長さ2 km、幅50～150 mの細長い低位段丘面をなし、国指定の名勝地、県指定の海岸風衝植物群落があり、そのカルスト段丘面には、陥没ドリーネ、ウバーレ、津波転石などが点在し、美女伝説の「マムヤの墓」転石や機織洞穴などもある。

以下、この地域の自然・文化的な事象のうち、顕著なものを列記する。

- ・長さ2 kmに及ぶ東平安名岬は、宮古はもちろん県内唯一の石灰岩低位段丘面の岬をなし潮間帯ベンチ、転石、岩塊があり、北海岸には沿岸漂流によって形成された細長い礁池がある。パナリ岩礁は陸地の名残を持ち、灯台の北海域には、波の華を立てるリーフ（潮間帯ベンチ）が広がっている。まさに海と空とサンゴ礁海がつくる絶景である。
- ・東平安名岬やマイバー海岸の津波石群は歴史津波、古津波の記録を示しており、1771年の明和大津波や、それ以前に起きた古津波の大きさを知ることができ、宮古島周辺の活発な地殻変動の歴史を知ることが出来る。現在、大学など複数の機関による年代測定等の研究が進められている。
- ・陸域部の東平安名岬根元一帯の山地には、凹凸カルスト、円錐状カルスト丘地群、舟底状陥没あるいは断層（神裁の場所）、大小の石灰岩堤など、石灰岩特有の地形がある。
- ・海岸部には、保良泉、コバクン滝、コバクン洞窟、コバクン鍾乳石（方解石）崖、太陽泉、ウブ泉などの湧水が多く、石灰岩特有の地下湧水群が形成されている（松川1992）。
- ・宮渡崎海岸には、背後にある宮渡御嶽林の聖域をはじめ、雑木林が広く分布している。東海岸と南海岸には枯れることのない地下湧水がみられ、日本唯一の海岸棚田状の「石灰華段」の地形が形成されている。ミクロダムのは数は大小300余あり、自然の造形美が観察される。現在複数の大学により「太陽泉石灰華段」の形成要因や地下水の化学的成分が調査され、年代測定や断面図・平面図の作成なども行われている。
- ・宮古では、中国の南宋・元時代に使われていた南宋青磁、類須恵器や硬貨等が保良元島（遺跡）などに出土している。これらは、南宋時代からの中国との貿易遺跡と考えられる。中国の古代国家、元王朝時代の「元史」に琉球南蛮貿易最古と考えられている記録として、「宮古の保良に婆羅公管下があって、密牙古人（宮古人）が貿易の途中、暴風のため遭難、中国温州永嘉県小離島中海山に漂着す。」（海外婆羅公管下密牙古人の1317年の漂着記録）とある。推測によるが、13世紀頃、琉球による最初の中国交易として、密牙古人（宮古人）の船が積極的に貿易を行っていたようで、当時の保良（東平安名岬付近一帯の海・陸域部）は宮古古代人の貿易・生活・文化があった場所として考えられている（平良市史編さん委員会1979）。
- ・宮渡崎には、大和人（倭寇：海賊）が海外貿易を

- 行う一番安全な場所として、「^{かーれーやかた}甲螺の館」があったとされ、薩摩の琉球進攻の時、琉球王朝「尚寧王」に仕える「啓泰」が鉄砲取引責任者となって、日本甲螺である明国人の「一官」や「願思齋」の鉄砲商人と計 50 挺入手したという話がある（松川 1995）。
- ・ マムヤ伝説、絶世の美女マムヤとマチャガマンマの話とその唄、パナリ岩礁（クープ）の御嶽、その沈没伝承、カンカムトゥでの火球とその撮影成功の話、コバコン台崩落の伝承など、奇談・珍談の話がある（松川 1992）。
 - ・ 現在、福嶺学区の新城、皆福、保良、吉野、七又、旧平安名村に御嶽が 26 ヶ所あり、2 月～6 月にクムズニガイ、プーズ等の祭祀行事、マイバー浜での海や旅の安全祈願を行うなど、地域の歴史や民俗文化の継承がなされている（平良市史編さん委員会 1994）。
 - ・ 宮古では昭和 6 年から昭和 17 年までトラバーチン採掘がなされた。そのうち保良東平安名岬などで 7 年間に亘って採掘され、国会議事堂建設石材に上質のものが利用された。崖下には今でも約 0.8 m³ の石材が多数残されている。現在まで残るトラバーチン転石群と共に貴重なものである。

Ⅲ おわりに

以上、ジオパークとしての可能性を探るため、宮古諸島から 3 地域を取り上げ、自然・歴史・風俗文化等の資源を列記してみた。その一部は琉球文化圏の他の石灰岩島にもみられるものであるが、宮古島や伊良部島には琉球列島随一の石灰岩台地があり、そこに独自性があると考えられる。地史を語る石灰岩台地、先人が残した自然と、そこで育まれた文化をいかに保護、継承していくかが、ジオパークへの課題となろう。具体的には、以下のような課題が考えられる。

- ・ 地域が主体性をもって、共に学習理解し、自然・文化的な新たなる価値観をつくっていく。
- ・ 地域資源（生物、鉱物、文化）は、住民全体の共有資源（財産）としてとらえていく。
- ・ 将来の自然的、経済的な変動や変化に備える体制づくりを考えていく。
- ・ 「宮古といえば、何がある？ 誇りになるものは？」と聞かれた時、より多くの人が賛同し、かつ感動し得るものを確かなものにして答えられるようにする。
- ・ ジオツーリズムの研究会・協会づくりを目指し、行政、関係機関、団体等の一層の連携を図る。
- ・ 学校教育や生涯教育において、自然や生活文化を

含めた環境教育を進める。

- ・ ジオパーク活動を、自然・文化的資源の保護だけではなく、地域の社会・経済の発展にも貢献するように方向づけする。
- ・ 行政や関係機関において専門職を配置し、一体感のある連携推進を図れるようにする。

まだまだ大小の課題はあるように思う。最大のキーポイントは、宮古諸島の自然と文化の多様性を理解し、新たな価値観のもと、社会意識の変化を構築していくことであろう。一時的な経済効果を乗り越えて残された自然・文化を「宮古の宝物」とする。現在のところ、八重干瀬、通り池とその周辺、東平安名岬とその周辺、渡口の浜、前浜、砂山、そして博物館、伝統織物館等は、よく管理・運営されてきている。いつの時代も本来の自然美、文化性、芸術性、神秘性の高いものへの崇高な思いは永遠に変わらない。観光立市、エコアイランド、環境モデル都市認定や景観行政団体の名のつくものは、根幹の部分は宮古島の生存基盤にある自然や文化を確かなものにしていくことが基本となるのではないか。ジオパークを考えていくことは、宮古島にとっても重要なことになろう。

元琉球大学教授の河名俊男先生、日本大学教授の小元久仁夫先生の両氏から、宮古の石灰岩台地等はジオパークに相当するものだという重要なコメントをいただいた。

本稿の執筆に際して、琉球大学教育学部の尾方隆幸博士には突然でご多忙の最中に快く閲読を引き受けていただき、用語・内容等、有益なご指導、ご助言をいただきました。ここに感謝いたします。

文 献

- 安谷屋 昭・川上 勲・久貝勝盛・砂川信夫・下地恵常・下地秀男・宮国 進（1977）：大神島の自然調査。平良市教育委員会編『平良市の文化財』、45-54。
- 安谷屋 昭（1999）：沖縄県池間島に分布する池間古砂丘について。平良市総合博物館紀要、6、71-77。
- 安谷屋 昭（2000）：沖縄県池間島の自然環境。平良市総合博物館紀要、7、101-124。
- 安谷屋 昭（2004）：沖縄県大神島の自然。平良市総合博物館紀要、9、45-56。
- 安谷屋 昭（2007）：宮古島市伊良部佐和田湾におけるノッチ形成速度の試算。宮古島市総合博物館紀要、11、57-68。
- 伊良部町・沖縄県ケイビング協会（1994）：「伊良部町洞穴群実態調査報告書」伊良部町・沖縄県ケイビング協会。

- 大井浩太郎 (1984):『池間嶋史誌』池間嶋史誌発行委員会.
- 大川恵良 (1974):『伊良部郷土誌』.
- 大城逸郎 (1981):宮古島地域の地質と古生物. 沖生教研
会誌, 14, 4-11.
- 大城逸郎・長谷川善和 (1998):沖縄県宮古諸島大神島の
島尻層群のスポン化石. 群馬県 自然史博物館研究報
告, 2, 109-112.
- 尾方隆幸 (2009):ジオツーリズムと学校教育・生涯教
育—自然地理学の役割. 琉球大学教育学部紀要, 75,
207-212.
- 河名俊男・中田 高 (1994):サンゴ質津波堆積物の年代
からみた琉球列島南部周辺海域における後期完新世の津
波発生時期. 地学雑誌, 103, 352-363.
- 川上哲也 (2007):『カツオ万歳—池間島カツオ風土記』
沖縄自分史センター.
- 佐渡耕一郎・亀尾浩司・小西健二・結城智也・辻 喜弘
(1992):琉球石灰岩の堆積年代についての新知見—沖
縄県伊良部島のボーリング試料の石灰質ナノ化石分析
より. 地学雑誌, 101, 127-132.
- プロヴィデンス号来航 200 年記念祭実行委員会(1997):『プ
ロヴィデンス号と八重干瀬』プロヴィデンス号来航 200
年記念祭実行委員会.
- 平良市史編さん委員会(1979)『平良市史 第一巻 通史編』
平良市役所.
- 平良市史編さん委員会 (1994)『平良市史 第九巻 資料
編 7』平良市教育委員会.
- 松川寛良 (1992):『保良風俗史』在沖保良郷友会.
- 松川寛良 (1995):『保良の土俗信仰』.
- 矢崎清貫・大山 桂 (1978):『伊良部島地域の地質』地質
調査所.
- 矢崎清貫・大山 桂 (1979):『宮古島北部地域の地質』地
質調査所.
- 矢崎清貫・大山 桂 (1980):『宮古島地域の地質』地質調
査所.
- 八重干瀬同人 (1991):『八重干瀬 (第 11 号—八重干瀬・
宮古・柳田国男)』八重干瀬同人.